

矢野龍溪の『新社会』

——明治近代化過程におけるユートピア思想の意義——

宮 井 敏

龍溪矢野文雄は嘉永三年（一八五〇）豊後国佐伯藩の重役の子として生まれ、上京して福沢諭吉の門を叩き、慶応義塾卒業後、郵便報知新聞に入り、時事評論に健筆を揮い、明治一五年、大隈重信の立憲改進黨の結成に参画、翌年（三十三才）、ギリシア史に取材した政治小説「斉武名士經国美談」を著わして大反響をもたらした。明治一七年より二ヶ年欧米諸国に滞在、「龍動通信」を報知に連載、同紙に空想的冒險小説「浮城物語」を掲載、好評を得た。一時、明治天皇侍従、清国公使等をも勤めたが、本領はあくまで改進黨のイデオログ、在野のジャーナリスト、政治小説の第一人者として、文筆を以て警世の文字をつづるにたったといえる。

明治初期の文学史上、矢野龍溪の名前がとりわけ特筆大書されるのは、もちろん前記の「經国美談」の空前の成功によるものであろう。江戸時代を通じて長らく御伽草紙のたぐいの「婦女子の読み物」として軽視されて来たいわゆる「小説」が、大衆に対する啓蒙宣伝の有効な手段としてあらためて認識され、芸術性を備えた完成度の高い、中・

後期の作品とは似ても似つかぬものながら、明治初期特有の、新聞とならぶマス・コミュニケーションの手段として一時期隆盛をきわめたが、そうした政治小説の典型がこの作品であったわけである。専制政治を廃して民権の確立を唱えるという作者の政治的理想は、その改進黨的限界にもかゝらず、当時の未熟な政治的環境もあって、政治に志す明治の青年達の間には大きな反響を呼びおこし、逍遙、花袋、盧花、透谷、独歩、泡鳴といった文学者はおろか、後に社会主義者となる若き日の片山潜、高野岩三郎すらもが熱中して愛読したといわれている。

明治三二年、五〇才にして官を辞し、清国駐劄を免ぜられた龍溪は、一〇年振りに筆を執って「矢野龍溪時事意見」と題する政治評論を執筆、更に筆を加えて三五年出版、同年七月、これを骨子とした対話形式によるユートピア小説「新社会」⁽¹⁾を公けにしたが、さきの「經国美談」を上回るほどの大反響を呼びおこし、この年一〇月一日までに一五版を重ねたといわれている。萬朝報明治三五年七月七日付(三二六二号)の幸徳秋水「新社会を読む」、毎日新聞七月九日付の松野翠「龍溪氏の新社会」、二六新報七月二一日付社説の「矢野氏と其著作——新社会を評す」など、いづれも一面トップ記事の扱いであり、八日二〇日発行の社会学雑誌第八号なども鶴沢幸三郎の「矢野龍溪の新社会を評す」と題するかなり長文の書評を掲載している。實際この作品は伝統的なユートピア物語の形式を備えたものとしてはこれまでにない整ったものであり、現状を分析批判した上で一つの仮説として未来の展望を示すという問題提起のスタイルが、きわめてぎん新なものとして未来へのヴィジョンを求めている大衆にひろくアピールしたものとおもわれる。

物語は第一回から第二一回までの本篇と、同年の一一月に発表された「新社会の補遺一節」と称するアペンディックスから成立っており、特別に長い第九回と第二一回をのぞいてほぼ同じ長さの各章にわかれている。いかに明治と

はいえ三五年ともなると、よみ易い口語文の会話体を多用した「金色夜叉」や「不如帰」もすでに出版されて超ベストセラーとなっていた頃のことなのであるが、この「新社会」の場合はさきの「経国美談」とかわらない旧態依然たる漢文調で書かれており、八〇年を経た今日、卒読に些かの困難をおぼえるものがある。にもかゝらず、むだのない緊縮した硬質の文体はさすが一世の名文家とうたわれた龍溪の真面目をうかがわせるものがあり、当時爆発的な反響を呼びおこしたのも当然のこととおもわれる。

「新社会」は金尾徳太郎と田美野悦蔵と名乗る二人の紳士が某国を訪れて一老人の邸に滞在し、この国の理想社会の状態を実際に見聞きしながら問答形式によって老人の解説を聞く、という形をとっており、「旧社会の末路、上、下」によって古い体制の実情を分析、批判し、「新社会の出現」においてこのユートピア社会が成立した当時の状況を示し、さらに「新社会における工業、商業」、「農業及び創案局」、「人民一般の生活」、「法律、教育」、「政治、歳出入」、「通貨、事業、輸出入」、といった項目別にこの社会の条件を明らかにし、「新社会の未来、世界平和の保障」、「新社会に入るの注意」という二つの章でしめくくっている。

こうした分析的で詳細な新社会の解剖図は明治以降いくつか書かれた不完全で断片的なユートピア像⁽²⁾とは全く趣を異にした、きわめてユニークなものであり、そこには明らかに二、三の西欧流のユートピアの影響が見られるのであるが、龍溪自身もこの書物の自序の中で、「孟爾の優都美は遂に是に至るの由なし。我が新社会は遂に是に達するの日なき乎」云々とのべ、まずトマス・モアの「ユートピア」について言及している。この「ユートピア」の日本最初の邦訳は（もとより英語訳からの重訳であるが）明治一五年、徳島藩出身の井上勤が「良政府談」と題して第二部の抄訳を試み、ついで翌一六年、「新政府組織談」と改題して東京思誠堂から出版したものだ、という事になっている。

さらに明治二七年には荻原綱厓が「理想的国家」という題で東京博文館の社会文庫の一冊として出版しているから、明治三〇年代の日本では少くともモアの「ユートピア」はかなり一般にも知られた書物だったといえよう。一方、エドワード・ベラミの「かえりみれば」の場合は、枯川界利彦が明治三六年六月二日付家庭雑誌第一巻第六号に「百年後の新社会」と題して抄訳紹介を行なったのが本邦初訳であり、又ウィリアム・モリスの「ユートピア便り」の場合は、同じく界枯川が週刊平民新聞の第八号（明治三七年一月三日付）から第二三号（同四月十七日付）までに全三二章を二六節に分け、十六回にわたって抄訳を連載したものが最初という事になっている。ベラミの分はのち明治三七年三月五日付で平民社版平民文庫の一冊として刊行され（「定価五銭也。但伝道用としては壹圓に付二五部」とある）、モリスの方は「理想郷」と題して同じく平民文庫五銭本として明治三七年二月二〇日付で発売されている。従って、ベラミ、モリスのユートピアは龍溪の「新社会」より一、二年おくれて日本に紹介されたわけであるが、「かえりみれば」の場合は一八八八年（明治二年）にボストンで出版されると⁽⁶⁾に六万部、翌年に十万部発売されたほどの当時の超ベスト・セラーであり、全米各地に「ナショナルリスト・クラブ」と称するベラミ・ユートピアの実践団体が組織された位であるから、かなり早い時期からアメリカ経由の社会主義の影響下にあったこの頃の日本の社会主義者たち、社会主義研究グループの間で、滞米中に或は帰朝後、この書物が原書のまゝでひろく読まれていたであろう事は想像にたたくない。（現に幸徳秋水は龍溪の「新社会」に対する前記万朝報社説の中ですでに言及している。）一方、元来ベラミに対する具体的反論として一八九〇年に執筆されたモリスの「ユートピア便り」⁽⁷⁾の場合も同じような状況があり、又平民社では「海外社会主義関係文獻」の洋書取次を積極的に行なっていたから、二年四ヶ月の留学経験をもつ龍溪が本邦初訳に先立ってこれらの書物に眼を通す機会があったであろう事は十二分に考えられる事なのである。

さて、龍溪を含めて当時の日本人にひろく知られていたユートピア物語は、一、二の例外は別として、おおよそ上記の三つにつきるものとおもわれる。尤も四百年前に書かれたモアの「ユートピア」と、一八八八年と一八九〇年にポレミックな一対として世に出た残り二つのものでは同時代的影響という事だけ考えてみても、到底三者同列には扱えないわけであるが、そもそも世界のユートピア文学の系譜が、よしプラトンの「理想国」やプルタークの「リクルガス」など古典古代のものにまで溯ることが出来るとしても、「ユートピア」という言葉そのものはモア自身の造語である以上、以後のすべてのユートピアは所詮彼の「ユートピア」を意識せざるを得ないわけであり、龍溪も又例外ではあり得ない筈である。大正期の数少ないユートピア研究家守田有秋なども、「龍溪氏は恐らく其最も多いヒントをモアの『ユートピア』より得て居る」と指摘している⁽⁸⁾。

とは云うものの、十六世紀イギリスの大法官、下院議長、外交使節にして、ヨーロッパを代表する哲学者、文人であつたトマス・モアと、明治期のジャーナリスト、政治家、小説家であつた矢野龍溪とは自ら、時間的空間的条件において、視野のスケールにおいて大きくくい違つているのは当然の事と云えよう。

まず云いうる事は中世以降のすべてのユートピア社会の母型となつているモアの理想社会は結局、その思想的基盤、総合的視野、分析的細部においてこれを超えるものがなかつた程であるから、白紙に描いた一個の空想社会の絵としては、それなりに完結しているわけである。それに対して龍溪の場合はその社会像を主として経済的側面に絞つたために、モアが描いたような宗教、風俗、結婚、安楽死などありうる理想社会の文化、生活の細部についてはふれる事なく、金融、流通、景気、労働、工場運営、歳出入と云つた経済機構の細部にわたる具体策が提示されている。つまり綜合プランと部分拡大図のちがひである。その上、龍溪の場合は単なる問題提起のユートピアに止まることな

く、すゝんで問題解決のユートピアであろうとしている。一六世紀イギリスの現実を超越して絶対に実現不可能な理想社会を所在不明の島の上に築くことによつて現実社会の矛盾を鋭く指摘しようとしたモアと、明治の近代化モデルの一つとして、些かなりとも実現可能な具体策を提示してみせた龍溪との違いは実にこの点にあったといえる。従つて守田有秋の指摘するような、龍溪が孟爾の優都美から得たであろうヒントというものも、実はおよそ理想社会を構築して見せる場合の一般的な基本構想のみに限られていたと云うべきであろう。「新社会の末路、上、下」二章は「ユートピア」第一巻と照合して、白紙の理想像を描くに先立って、現存社会の批判、分析という機能を果しているし、資本主義経済の矛盾の克服としては同じように商業の圧縮が考えられている。そしてそのために、「ユートピア」の方では通貨が廃止されて、金は便器や奴隸の足枷に使われているという、あの有名なエピソードとなり、「新社会」では同様に手形同然の紙幣様のものが辛うじて流通している形となるのである。

さらに又、この二つのユートピアの共通点、と云うよりはすべての理想社会がひとしく力説するポイントの一つは、およそ社会の犯罪の大部分は民事、刑事をとわず、結局は私有財産をめぐる争いから発するものであり、従つて私有財産制を廃止すればほとんどの犯罪は消滅し、法律はきわめて簡単なもので事足りる、という点である。「姦通及び婚姻破棄以外の」他の罪科に対しては法規の処罰は一つもなく、だから「彼等の法律はその数から云つてごく少ない」ものだとモアは説明しているし、龍溪も「新社会の初年に我々の驚きたるは訴訟沙汰の皆無なりしこと」で、そのため「貴国の如く煩わしき条例法律にして新社会に必要なもの」は殆どなく、「我が新社会の法律の簡単なること今更説明の要」はない、と云っているのである。

こうした両者のいくつかの類似点のなかで、おそらく龍溪が最も感謝してモアから借用したであろうアイデアは君

主制の問題であつたとおもわれる。モアの場合、一五三五年に勅命によってロンドン塔で殉教の死を遂げるに際して、今国家主権の名において己の命をうばおうとしている王のわずか数代あとの王が、一世紀をへだてて議会の決議によって命をうばわれる事にならうとは夢にも考えなかつたであらうし、従つて君主制ではなく共和制をとる理想国などいかに奇想天外のアイデアをこらすユートピアといえども、十六世紀の人間としては到底おもひもつかぬ事であつた筈である。プラトン以降のユートピア的発想のなかで、私有財産制の廃止こそ好んで用いられたが、君主制の廃止などという問題は少くとも清教徒革命まではまさに問題外の事であつた。ところがモア没後の四百年の世界史を前にした龍溪の場合、その逆の、私有財産制はみとめても君主制はみとめないという形、つまり資本主義経済にもとづく共和制というユートピアが多くの実例からおしても十分に考えられた筈である。しかるに彼はモアと同じく君主を戴く共産社会を考えた。王政復古と称する、幕藩体制を倒して天皇制をよみがえらせる革命をおえたばかりの明治人にとっては、わずか数十年とたゝぬうちに再びその天皇制を否定するという考え方は空想の中においてすら所詮無理なアイデアであつたわけである。かくて明治人龍溪は四世紀をへだてて十六世紀人モアの共産主義的君主制を何等自己矛盾なく借用したという事になるのである。

一方、十九世紀末のアメリカではどのようなユートピアが考えられていたであらうか。当然の事とはいえ、それは共和制であり、しかも共産制の理想社会であつた。作者ベラミは、はじめのうちこそは純粹に文学的な幻想にかられて書き初めたが、次第に書きすすんでいるうちに、とりわけ「産業軍」の構想を思いついたのちは、真剣に産業界の再編成を考えはじめ、十分に実現の可能性あるユートピアとして書いたのだと云っている⁽⁴⁾。つまり、ルイス・マンフオードの区分に従つて云うならば、モアのそのような「目標なき逃避のユートピア」とは正反対の、「目標ある再

建のユートピア」を描いてみせたのである。今日の未来論で云うところの「未来予測による未来社会のモデル」と云うことになる。

その事は又正しくアメリカ的伝統につながるものであったといえる。もともとアメリカ建国の父祖たちはユートピアを求めてこの広漠たる大陸へやって来たのであり、彼等にとつてのユートピアとは歴史の発展過程に人間的努力を加えればこの地上に必ず実現する筈の具体的プランに外ならなかった。その上この大陸はさまざまな実践的ユートピアの実験場でもあった。ホーソンも関係したブルック・ファームは「かえりみれば」と舞台を同じくするボストン南郊に造られたし、S・T・コールリッジのパンティソクラシー（一切平等団）はベラミより一世紀まえ、ペンシルヴァニアに計画され、ロバート・オウエンのニュー・ハーモニーはインディアナ州に設定された、等々。

マンフォードによれば「再建のユートピア」は大自然とその中に住む人間の目的により合致する方向で社会の再建を目指すのみならず、ありうる将来の発展の方向とも一致するように計画されねばならぬという。そうだとすればそれは社会の非連続的發展や飛躍、つまりは暴力革命による急激な方向転換をみとめない再建計画であり、それはまさしくベラミと龍溪が考えた社会改造案に外ならなかった。新しい体制への平和的移行、これこそが「新社会」が「かえりみれば」と共有する最大のポイントであったといえよう。もちろん、ベラミのいう「自由競争」、龍溪のいう「随意競争」は共に産業資本主義が必然的にもつ悪しき側面として指摘され、そのゆきすぎを是正するために国家独占資本の設定、商業の圧縮、通貨の廃止という手段が共通して用いられているわけであるが、社会的フリクションを極小ならしめて、近代化の最大の果実をうるという点で両者は共に革命なき近代化ユートピアを構想した事になるのである。歴史上の意味は違っているも南北戦争と明治維新という大きな内戦を実地に経験した両者にとっては同胞

相撃つ流血の惨事だけは絶対に再現したくないという心情が強く働いたとしても不思議はないし、とりわけ新時代のにない手の一人として積極的に「知識人の組織参加」を試みる龍溪にとっては、江戸の文人好みのニヒルな逃避的隠遁思想は全く無縁のものであったであらうし、その結果必然的に実践的有効性を約束する平和な改良主義的ユートピアが考えられたのである。

だが、実際問題として私有財産の全き廃止という社会構造の根本的変革が、はたして何の抵抗もなしにスムーズに行なわれうるものであろうか。ウィリアム・モリスはそれは絶対におこり得ない事だと考えた。一八八九年五月十三日付のブルース・グレイジャー宛の手紙⁽⁴⁴⁾の中で、この、海の向うで大評判になった小説のことにふれて、ベラミの紀元二〇〇〇年の社会には住みたいとも思わないし、又そのような社会がはげしい社会の激変なしに成立しうるとも思わないとのべている。そして同年六月二日には自ら主宰する社会主義連盟の機関誌「コモンウィール」誌上⁽⁴⁵⁾でもこの問題を取り上げ、ベラミが想定するような肥大化した国家権力の下での非人格的な管理機構がいかに個々人の豊かな個性にとって障害となるかについてのべ、共産制社会への平和的移行など全くの幻想にすぎないとしてきびしく論難したが、さらに具体的反論として翌一八九〇年一月一日から自分自身のユートピア物語「ユートピア便り」を同誌上に連載することになったのである。

そのため、モリスのユートピアはベラミのそれとくらべると共通しているのは私有財産の消滅とそれに伴なういくつかの社会現象ぐらいのもので、そのほかのあらゆる点において全くきわだったコントラストを見せている。そもそも利潤追求を第一義とする産業資本主義は生存競争の激化をまねき、貧富の格差の拡大は成功崇拜と人間疎外をうみ、産業優先の思想は環境破壊をもたらし、各種の公害問題を発生せしめた。一方労使の対立は次第に尖鋭化し、頻

発するストは社会的にも深刻な問題となり、統制のないアナキーな風潮は革命前夜をおもわせる社会不安をうみ、抜本的な解決が早急にのぞまれる事となったという、まずこゝまでの現状認識においては両者いづれも大差ないのであるが、その解決策としての私有財産制の廃止という目的を達成するまでの手順とその後の展望という点で両者は天と地ほどに違っていたのである。

ベラミの場合は、アナキーな混乱からの救済として、まず「利己心なき個人主義」をかゝげて「一体化の宗教」ととなえ、高能率の管理組織として大統領を頂点とするピラミッド型の「産業軍」を構想し、これによって全産業を統制し、全国民のすべての労働を組織化し、全資本を国家機関に集中し、高度な技術革新によって高度な経済成長を獲得し、平和的近代化によって都市中心の産業国家を構想したのである。

これに対してモリスのユートピアは、整然と都市化したボストンとは反対に、半ば田園化したロンドンを市心に、すべての国家統制を廃した、適限を守るコミュニティが美しい自然のなかに反中央集権的にひろがっている。みるべき近代技術もなく、学校教育制度もなく、貨幣なく、議会なく、政府なきこの社会はつまりはありうるすべての近代化の全き反指針として提示されているといえよう。しばしば誤解されてモリスは中世主義者、復古主義者とされるが、モリスの中世主義は単なるロマン派詩人の憧憬から出るものではなく、蓄積せる社会的諸矛盾の暴力的解決としての革命を通じてはじめて獲得される反近代のイデオロギーであり、「ユートピア便り」全三三章の丁度真中にあたる長い第一章は「変化はいかにして訪れたか」と題してこのユートピア社会が誕生する前夜の動乱についてくわしくのべている。A・L・モートンによればそれは「革命を扱ったいかなる空想物語にも見られぬ確信にみちあふれた」描写となっているのである。⁽⁴⁾

このように見て来ると「新社会」が「ユートピア便り」から得るところは殆どないと云つてよく、せいぜい「ノーホエア」を訪れた主人公を聞き手として一老人が質問に答へつつ、この理想社会について解説するというくどりぐらいのもので、あとは私有財産制をみとめない、一般のユートピアに見られる社会現象が二、三共通するにとどまるのみである。結局のところ龍溪は実作によるベラミ・モリス論争では終始前者の側に立っていたからであらう。

以上、明治中期までに日本に知られていた三つのユートピア物語と「新社会」の比較検討を試みたが、三者になく「新社会」のみにある龍溪独自の構想は、私有財産制の廃止にあたって新社会政府が行なつた財産買上げの措置に見られる漸進主義である。

「夫に就ては我国にても当時実に諸種の議論あり、過激の議論は没収を主張するもありしが、一般多数の意見は可成く『個人の所有権』を傷つけぬ様にすべしとて遂に之を買上ぐるに帰着」し、先づ最初に「個人所有の土地山林、ついで諸製造所の固定資本、及び各商店に仕入れ一切の商品」を、「公平なる鑑査」によつて査定し、「内国人限り所有を許す据置公債證書」として旧所有者に還付することになったが、「此公債は利払のみにて元金は一定の仕払をなさず、国家の都合次第永久に据置」くという仕組みであつた。従つて自己所有の資産よりの果実は所得となるが、所有権は部分的に凍結される形になるわけである。そこで、「買上以前の貧富の偏倚」はそのまゝであり、四民平等の原則が貫徹されるわけではないが、新社会における将来の生産力が飛躍的に増大する事が予想されるので貧富の格差は逐次解消に向うし、又少くとも旧社会で「未来永劫貧富が益々偏倚すること」だけは防ぎうる筈だ、というのである。これは確かに、先にのべた鶴沢幸三郎も指摘するように、「地主、資本家の恐怖心を慰藉せん」とするには一定の効果が考えられる反面、「却つて牢固たる階級國民を安産して旧社会に倍加するの害弊を見る事燎然として

明らか」であろうとおもわれる。この点大いに議論のあるところであるが、ともかくこの資産買上げと君主制とが龍溪のユートピアのきわだった特徴になっていたのである。

ところで明治も日露戦争までの日本では、欧化思想の一つとして社会主義に関心をもつ研究集団や、その正しさを信じて実践をめざす社会主義者の団体などの多種多様な社会主義があり、キリスト教社会主義や労働組合社会主義などアメリカ系統のもの、フェイビアン社会主義のようなイギリス系統のもの外にも人道主義者、自由主義者の急進派もあり、ドイツ系統の影響がはじまるまでは、雑多で重層的な活動が活潑につづけられていた。従ってこうした多彩なうごきすべてを一括して簡単に社会主義と称するのも些か問題のあるところであるが、維新の社会改革の行きづまりを打破しようとして、その解答を社会主義に求める考え方や、よりラディカルで破壊的な思想に対する先制防衛的な措置として社会主義を採用する発想や、それを二〇世紀の新思想であり、避けがたい世界の大勢だとする認識や、個々の社会問題への対応から個別改良の限界をさとして抜本的解決策として社会主義に到達した人々など、まことにさまざまなうごきに支えられて、明治社会主義は非戦論を唱えたグループに対する政府の弾圧が一樣にはげしくなるまでさかんにつづいていたのである。

社会主義の先駆的作品とされる「新社会」の作者龍溪の場合、求めて宮内省御用掛となり、第一回帝国議会開院式には明治天皇侍従として陪席し、さらに勅命を奉じて特命全權公使となった人物を、まさか実践をめざす社会主義者とは呼びかねるであろうが、少くとも異色ある社会主義研究家、ユニークなユートピアンであった事はたしかであり、その事はこのような雑然とした、公式論が支配的となる前の、はなはだリベラルな各種各様の社会主義のありようのなかではじめて可能な事だったわけである。

こうした、全体としての保守的体質の中の相対的な進歩性が明治人龍溪の特色の一つであり、時代をはるかに先取りするすゝんだ見識と、体制へのかわらぬ忠誠とが奇妙に矛盾なく同居していたのである。もともとの頃の政治家、政論家にとって、明治の国家体制というものは王政復古という大義のもたらした所与の現実であり、疑うべからざる不可侵の存在であった。そしてその事は龍溪らを有力メンバーとする在野の改進黨にとっても常にそうであり、政権担当の用意ある第二軍として彼等に疎外感はなかったし、例えば国家観の解釈をめぐる正統性を争う必要もなかったのである。今もし明治国家に大きな障害があらわれたとしても、維新の成功例が人々の記憶にある間は、再びこれと対応して成功を収めうるという確信があり、その事がすべての事象に対してきわめてオプティミスティックな態度をとらしめ、常に国家体制の基本に疑義を抱かず、末端の仕組みの手直しに走ることとなったのである。民権党たる改進黨が綱領の第一に「王室の尊厳を保ち、人民の平福を全うする」とうたっているのも、中江兆民の云う「恩賜の民権」にとどまって支配権力の歴史的矛盾に気付いていない証左に外ならない。「新社会」において龍溪は「社会的矛盾を生産関係においてとらえず、主として分配の問題に限った」と指摘される。⁽⁴⁴⁾だがそれはひとり龍溪のみならず、この頃の社会主義者にしばしば見られる一般的傾向であった。彼等にとって「社会問題」とは支配体制の問題よりはより強く「経済問題」であり、経済の仕組みでは根本たる「生産関係」よりは運用面たる「分配関係」により関心が注がれていたのである。

その上、冒頭にも記したように龍溪の出自は小藩ながら上級士族の家柄であり、かつ彼の属した改進黨そのものがブルジョワ勢力に倚靠する存在であったから、結局彼は己の属する階級の階級的利害をこえる事が出来なかった。「民権伸張、憲政樹立」の大義をかくつけて華々しく筆陣を張った「經国美談」ではあったが、早くも後篇に到って、

「ソノ目的トスルトコロハ現在社会ニ有スルノ患害ヲ除クニアラズシテ、タダ自家ノ胸中ニ美麗ナル社会ノ雛型ヲ想像シ、ソノ一時ニ行ワレ難キニモ拘ラズ、コノ美麗ナル雛型ノゴトク現在ノ社会ヲ改造更革セント欲スルニアリ」(後篇第二回)とのべて、元来奔放なるべきユートピア的発想に歯止めをかけている。そして「新社会」において、私有財産廃止という革命的前提の下においてすら、財産買上げ措置によってブルジョワ的利益をまず守ろうとしたのも、いづれも彼のブルジョワ的民権ユートピアの限界に外ならなかったのである。

そうは云うものの、「新社会」執筆後二〇年にしてイギリスでは労働党のマクドナルド内閣が成立、国王を戴く社会主義政権が革命なくして合法的に誕生したし、その後各地の社会主義国が土地、企業の有償国有化を実行した例は決して珍しくないのである。社会主義諸国家の停滞、混迷がつづいて、その根源的意義が問い直されている今日、雑多ではあろうが観念的ではない、未整理ではあろうがイデオロギー過剰からのがれていた明治社会主義の一つとして、矢野龍溪の社会主義ユートピアを、明治維新の再近代化プランの一つとしてかえりみることは決して意味のない事ではないであろう。

- (1) 「新社会」、矢野龍溪集「越智治雄編、明治文学全集一五巻 筑摩書房」
- (2) 明治一七年服部誠一「第二世夢想兵衛胡蝶物語」、同二〇年米澤笑史「明治二三年夢想兵衛開明物語」等は滝沢馬琴の「夢想兵衛胡蝶物語」(文化七年)の亜流であり、高瀬貞郷(明治一六年)や末広鉄腸(同一九年)の「二十三年未来記」は明治二三年開設予定の国会予想論である
- (3) 原典であるラテン語からの直訳は昭和五三年沢田昭夫により改訂新訳が出された(中公文庫D21)。この間一世紀にわたって不完全な重訳が用いられていた。拙稿「トマス・モア『ユートピア』の新らしい日本語訳」、同志社大学英語英文学研究No21参照
- (4) 明治三七年一月には平井広五郎の全訳が「社会小説百年後之社会」と題して東京警醒社から出版されている。

- (5) Edward Bellamy, *Looking Backward, 2000-1887*, Boston, 1888, Ticknor and Company.
- (6) 松本弘陽著「日本社会主義の思想」(筑摩書房) 第一章第一節参照
- (7) William Morris, *News from Nowhere, or an epoch of rest, being some chapters from a utopian romance* 1891, Reeves & Turner, London
- (8) 〃。明治元年、近藤真孝(一八三二—一八八六)という海洋学者が公務(海軍操練所翻訳方)のかたわら出版のおてもなく一冊の書物を訳し終えた。それはオランダのジョス・コリデス博士の『紀元二千六十五年、一名未来の瞥見』というもので、…(紀田順一郎「開国の精神」(玉川大学出版部)一九九ページ)
- 〃。「大奇書」社会主義新小説『羯南陸實音序文』理幸士依線軒主人著『文明の大破壊』東京博文館蔵印(Lignatius Donnelly (1831-1901) *Caesar's Column; a story of the Twentieth Century*, (1861) の全訳)
- (9) 「四六版解放」文藝資料「ノービーヤ集號」(臨時大正十六年一月一日発行、解放社) 第四篇、四ページ。(なおこの資料は多くの文献目録に昭和十六年一月一日発行、と誤記されている)
- (10) トマス・モア著、平井正穂訳「ノービーヤ」(岩波文庫) 一三八ページ
- (11) 矢野龍溪、前掲書、二五四ページ
- (12) Edward Bellamy: "How I came to write *Looking Backward*", *Nationalist Magazine*, May 1889, (Arthur E. Morgan: *Edward Bellamy*, Columbia Univ. Press, 1944, p. 224)
- (13) Lewis Mumford: *The Story of Utopias*, (The Viking Press, N. Y., 1922), p. 16
- (14) Philip Henderson, ed: *The Letters of William Morris to his Family and Friends* (Longman, London, 1950), p. 315
- (15) William Morris, *Artist Writer Socialist*, ed by May Morris, (Russell & Russell, N. Y. 1936) Vol. II, p. 501.
- (16) ウェリアム・モリス作、松本義雄訳「ノービーヤ集號」(岩波文庫) 一三八ページ
- (17) A. L. Morton: *The English Utopia* (Lawrence & Wishart, London, 1969), p. 220
- (18) 中江兆民「三酔人経綸問答」(岩波文庫) 一九五ページ
- (19) 石田雄著「明治政治思想史研究」(未来社) 三三三ページ